

ホトケドジョウ生息地・湧水湿地の再生

山科ゆみ子（丹波地域のホトケドジョウを守る会会長）

はじめに

ホトケドジョウは、コイ目タニノボリ科に属する日本固有のドジョウの仲間である。体長6 cm程度、体は円筒状で細長い姿をしている。近似種にナガレホトケドジョウという種がいるが、ナガレホトケドジョウの吻部には暗色の斜帯があることからホトケドジョウと区別ができる。

ホトケドジョウは流れの緩やかな小川や水田の脇にある水路に生息しており、底生性の水生昆虫を食べている。兵庫県は本種の最も西の生息域にあたり、今のところ丹波市の由良川水系と加古川水系にしか生息の確認ができていない。

「丹波地域のホトケドジョウを守る会」では、7年にわたり、生息環境調査・保全や丹波地域での新たな生息地探索等の1．フィールド調査、2．生息地の再生、3．普及啓発の活動を行っている。

活動内容

フィールド調査では、生息地で月1回タモ網による採捕調査、仔稚魚の目視調査、水質調査を実施している。ホトケドジョウは非常に生息域が狭いため、地元の人でもその存在を知らないことがあり、そこで小学校へ出前授業を実施している。生息地の再生では、現在の生息地は増水により個体が生息に適さない下流側に流されたり、土砂の流入により稚魚の生息場所の陸地化が進んでいたりすることから、局所的な絶滅を防ぐため、泥さらいや、新たな生息地を造成した。

生息地の造成の一つである由良川水系の湿地は小さな休耕田から流入するため池で、幅5 m程度と面積が非常に小さく、生息個体数も少ない場所である。休耕田の上流部は流速が早い小さな渓流域で、池より下流はコンクリートのU字溝である。増水による下流への逸出や生息地の水不足により、容易に絶滅する可能性がある場所である。

結果

人工池上流側が休耕田であるため、現在のため池と同様の環境を造成することができた。造成にあたっては、生息地上流に大きな水面を作ると水温が上昇する恐れがあるため、大きさを現況のため池と同程度の面積とし、遮光ネットを掛けることで水温上昇を防ぐ工夫を行った。こうした工夫の結果、造成前、造成後では水温、水質において変化はなかった。



現在は、現況のため池にいるホトケドジョウのヒレの一部を切ることで標識とし、下流の個体が上流側へ遡上するかを調査している。

まとめと考察

これまでのフィールド調査の結果、稚魚は流速がほとんどなく水深が1～3 cmの浅い窪地などに生息していること。水質は、水温年平均で14.2、ph（水素イオン指数）は6.7、溶存酸素量は94.2%であった。ホトケドジョウは冷水を好み、弱酸性で水中に溶け込む酸素量が多い場所に生息していることを確認することができた。また、由良川水系の湿地での造成も良好な結果が期待できる。

今後の活動においては、新たな生息地の探索調査に重点を置きながら、域内保全と域外保全を探りながら、ホトケドジョウの保全、生息地の環境保全を行っていく。